
チャック全開ですよ

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チャック全開ですよ

【著者名】

Z4875X

【作者名】 雨月

【あらすじ】

憧れの生徒会長に告白し、成功をおさめた新戸風太郎。しかし、その日の放課後、クラスのアイドルに告白されいやむやな関係になる。彼は無事に高校生活を送れるのだろうか。

第一話：人生の分岐点

第一話

俺、新戸風太郎は中学生の頃から一学年上の先輩の事が好きだつた。しかし、恥じらう乙女のとき心境でなかなか告白できず、気が付いてみれば高校一年生。先輩を追っかけて入った高校の入学式では先輩は既に生徒会長をやつしており、先輩にあこがれている男子^{ライバル}生徒は掃いて捨てるほどいた。

俺が一年になつたと言つ事は先輩が留年でもしない限り三年生になり、時期卒業するのだ。先輩が留年する事もなく、四月の一週日の昼休みとなつた。

「おい、顔色悪いぜ？」

「……これから人生の分岐点に行つて来るだけだ」

俺はどうとう先輩を校舎裏に呼び出して告白した。そこらのへたれとは違うのだ。

「どうか、新戸は私の事が好きだつたんだな……うん、いいぞ」

先輩と俺のめぐるめぐバラ色の高校生活が始まるのだとその時は信じて疑わなかつた。もちろん、すれ違いや些細なことでの喧嘩、仲良くなる下校時の出来事等、酸いも甘いも体験していくんだろうなと思っていたその矢先、正確に言うなら先輩に告白してオーケーしてもらつたその日の放課後の事だつた。

自分の下駄箱の中に都市伝説か何かと思われていたラブレターなるものが入つっていたのである。内容は俺の事が入学時から気になつていた事、今日の放課後に裏庭に来てほしい事が書かれていた。

きつとこれは知り合いの悪戯であろう、そう思つて俺は無視するこ

とに決めた。だが、何故かクラスメートが俺の前に立ちふさがる。「ううう、帰つらう二度ならんが」

「おいおい、帰っちゃうと大変な事になるぞ」

「どうせお前が書いたんだろうが。俺にはお見通しなんだよ……」
んな纖細で乙女っぽい字はお前か、クラスのアイドルの中原美奈子
さんだけだ」

「そう、中原美奈子さんからのお手紙だ。いけ、行ってお前の幸せを掴んでくるんだつ」

熱血入った声でそう言われて俺は裏庭まで連行されていった。
無理やり押され、俺は下を向いて待っていた中原美奈子さんの前に
ふらつきながら登場。彼女は俺を見ると初めて見るような照れた
仕草をしていた。普段は物事をはっきり言つような委員長タイプな
んだけどな。

「う、ごめんね、いきなりあんな手紙出したって…迷惑だったよ
ね？」

生徒会長に告白をし、見事玉砕していたのならひざまずいて『ありがとうがとう、あなたこそ私のメシアです』とのたまつていた事だろうな。

「ちょっとだけ……ぬいわ……」「うん、本当……」

すつじく暗い表情に早変わり。なんだか罪悪感で胸がいっぱいになつた。

「あー、こやいや。その、さ、ほら、俺って帰宅部じやん?だから急いで帰ろうかなあつて思つた時に靴の上に手紙が置いてあつたから一生一度もらえるかどうかもわからないような手紙がくしゃくしやになつちゃうかもしけないつて意味で迷惑つて言つたの。うん、直接渡してくれればよかつたかなー、なんてね…あ、あははは…自分で何言つているのかわからないやー」

心の底からよかつたあといつ表情を見せてくれていい。

「そ、それでね、その、手紙に書いていたんだけど… あたし、新戸

君の事が好きなんだ」「

「え、あ、あ～、そうなんだ。はは、もうつた喜びで頭がいっぱいよく読んでなかつたよ～……具体的にはどういう事が書いていたのかなあ」

「单刀直入に言つね、あたしと付き合つて欲しいの」

「この問いかけにうんとか応えると何だかすごく大変なことになる気がするのだ。いや、気がするんじゃなくてこれは一一股と言う奴だろう。ばれたら大変どころか、想像に絶する事が起るに違いない。当然と言うか、断るしかないだろう。

「「」め……」

「駄目なの？」

「俺にはか……」

「ぶわっと目に涙がすごい勢いで溜まつて行く。去年、他校の不良生徒数人を相手取つてなお説教をし、勝利をつかみ取つた女の子が一切見せなかつた涙を初めて見てしまつた。

「俺には力……ンボジア帰りのおじさんの相手をしないから今日はちょっと急いで帰らないといけないんだ……すごく、ありがたい申し出なんだけど、その……嬉しいけど恥ずかしいからさ、友達からじや駄目かな？」

「そう、だよね。うん、いきなり付き合つてくださいとかおかしいもんね。うん、新戸君がそのほうがいいって言うのならそれでいいよ。驚かしちゃつてごめんね」

「はは、いいよいよ。俺もなんだか混乱しちゃつて変な事を口走つてごめんね」

「これなら俺は一股かけたことにはならず、世間的にも言つて恋人と親しい友人が出来たと言うだけだ。

しかし、問題が一つある。俺に告白してきた女の子は中原美奈子。俺が告白した生徒会長の名前は加賀美美奈子なのだ。ま、まあ、恋人と友達だしな。ニュアンスを間違えたりはしないだろう。

こうして俺の高校一年生は少し雲行き怪しく始まったのだった。

第一話・愛の詠まつたお弁当

第一話

澄み切つた青空はきつと青春を謳歌している連中の為にあるんだろつ。憧れの先輩に告白し、彼氏彼女な関係となつた俺だつてその青春を謳歌している人間の種類に入るんじやないだろうか。告白した、された次の日というのはもつと晴れやかでもいいと思うんだけどな。

「つはあ～…」

「おーい、新戸～そつちにボールがいつたぞー」

飛んできた言葉も右から左に抜けて行つて俺の心は全く晴れない。たとえ、視界に白球が入つてもそれは俺を素通り……

「いたつ…」

することもなく、俺は鼻つ面に当たつた白球で見事に転倒した。転倒するはずがないつて？がけつぶちで小学生のタックルを不意打ちで喰らつてみればいいさ。

「やつりー、新戸のエラーだねつ」

「てめえ、なんでお前がここにいるんだよつ」

四月の体育、ソフトボール。先ほどの白球はじつやらクラスメートの田畠焰の放つたボールだつたらしい。俺の名前も大概変だと言われるが、焰(ほむか)なんて名前つける親の顔が見てみたい。

「いいじゃないの、ソフト。みんなでやつたらなお楽しいよ」

バットを乱暴に振り回しながら素人くさいスイングを続ける。ランニングホームランとなつたよつでイライラした俺は田畠に向かつてボールを投げてやつた。

かきーん……じすつ。

「…………」

「あ、『じ、じめーん。わざとじやないんだよ』

悪い事はしちゃ駄目だね、しちゃつたら後でひどい事が怒るんだよ…ぐすん。

そんなこんなでお昼休み。お腹の減った高校生にはこの時間が一番うれしいもので早速お弁当を取り出そうとするも、無い。

「新戸君、どうしたのですか？」

坊ちゃん刈りにごるぐる眼鏡のクラスメートが話しかけてくる。俺としては生徒Aでも構わんが、名前は中州秀作という。それなりに頭がよく、それなりに人が良くて、運動が出来ないが彼女（モニタ一から出てくれないのが悩みらしい）がいる少年である。

「俺の弁当が無いんだよ。もしかして中州が食べたのか？」

「食べるわけありませんよ」

「そうだよなあ…」

購買には今から行つてもパンとか残つてないし、外のコンビニで買ひに行くには外出許可申請とか面倒な事をしないといけないしで…どうしたもんだろうか。

「あれ、どうしたの？」

そんな時、中原美奈子さんが俺に声をかけてくれたのだった。

「新戸君のお弁当が消えたらしいのです」

「そつか、大変だね」

「うん、大変だ。しょうがないから中州達からちよつとぢづつおかずをもらつてしまつたかなあつて思つてるとこだよ」

「はい、これ」

凹んでいた俺に差し出されたのは可愛いハンカチーフで包まれた俺にとっては小さなお弁当箱だった。

「えーと、これは？」

「お弁当だよつ。新戸君、ううと、風太郎君の為に作つてきたんだよ。こんな言い方したら悪いけどお弁当が無いのなら食べてもらえ

るよね

「そりゃもう、心の底から感謝するよ」

もしかしてこの娘っ子は俺の事を好きなんじゃなかろうか……いや、そういうや昨日告白されたばかりだったな。

ともかく、俺は急場をしのぐ事が出来たと言つわけだ。感謝感謝、中原さんは足を向けて寝れないな。

「本当は一人で食べたいんだけどこの後用事があるから」「めんね」

「ああ、こや気にしないでいいよ。弁当ありがとう」

わざわざと出てこつた中原さんを拝みながら俺は弁当のかわいらしい包みを広げる。

「ははあ、まさか一人がそういう関係だつたとは……でも新戸君、昨日生徒会長を呼び出していくせんでしたか?って、結果はわかりきつますね。ごめんなさい」

勝手に勘違いしてくれた中州のことなんて放つておくことにした。別に友達から弁当をもらつただけだ、なんら問題はない。たとえそれが手作り弁当だったとしても、ご飯にハートが作られていたとしてもだ。

「おお、新戸よかつたじゃないか」

田畠がこつちに机をくつづけてくるのを足で妨害しながら反論する。

「俺の弁当が無いから仕方がないだろ?」

「そつかそつか、うんうん……ほほえましいなあ」

あははと笑う田畠にこつちは心の中で色々と苦しいんだと言つてやりたかった。しかし、俺の弁当箱はどこに行ってしまったんだろう。

第三話・嵌められた風太郎

第三話

四月ももう終わりの最後の週、木曜日。放課後になつて放送が鳴りだした。

『ピーンポーンパーンポーン…………一年A組新戸風太郎、至急生徒会室前まで来なさい…………ピーンポーンパーンポーン』

何故か『ピーンポーンパーンポーン』の部分が生徒会長の声だつたが気にするまい。

「新戸、今度は何したの？」

「おい、やめろよ。それじゃ俺がいつも何かしでかしているようじやないか」

「実際そうだと思うけどなあ」

「一年生の時は学期中に一度は大きな事件を起こしていましたよ」「そ、そうだったか？忘れちまたなあ……ともかく、行って来る」これ以上此処にいても過去の傷をいじられるだけだろうからな。恋人らしいことなんて先輩とはほとんど何もしていないし、甘い期待なんて持たずに行つたほうがよさそうだな。そりやあ、生徒会室での密会（既に全校生徒に知れ渡つているが）なんてすばらしい話だけどな。

「実はな、女子生徒からの報告があつて一階の渡り廊下の通風孔奥から異音が聞こえてるやうだ。これから私と新戸で調べに行こうと思つ」

「了解しました」

ま、やっぱりこういう事になるんだろうな。

渡り廊下は旧校舎とつながっており、人もそれなりに通る。通風孔は人が四つん這いになれば何とか通れるほどの大きさでいたずら防止のために特殊なネジで固定されているのだ。

やたら手慣れた手つきでネジを外し、自ら先に入りこむ。

「新戸、続けてきてくれ」

「わかりました」

「ひつやつて先輩と一緒に何かの作業をしていると中学時代を思い出出すな。

「新戸、裏庭の草取りに行ひつ」

「新戸、花壇に新しい花の種をまひつ」

「新戸、職員室の掃除を頼まれた」

おかげで俺は先輩が卒業した後生徒会長に任命されましたけどね。夕焼け、それなりの暗さの通風孔。じめじめとしたようなことはなく、手のひら、膝頭には少しだけ冷たい感じを受けるだけだ。そして、俺の視界いっぱいに広がるのは先輩のお尻。役得である。「ひつ」は他のところにつながっているとは聞いていないから、きつと途中でフインがあるんだろう

「そうですか」

「ああ、特に異常が見られなかつたら今のままの状態で戻らないといけないからな」

つまり、先輩のお尻が迫り来るなかバックで出ないといけないってことか。それはそれでいいんだけどね。

ぼーっとしていたのが悪かったのか、先輩のお尻に顔をうずめてしまった。

「うわっふ

「……行き止まりだ。新戸、壊れたファンがあるくらいだから戻ろう」

「ふえーい

もうちょい先輩の尻に顔をうずめておけばよかつたかなと思いつつ、バックで戻ることにした。光が差し込んでいるところまで戻り、

気が付く。

「あれ、閉められちゃつてますよ」

「何？本当か？」

「はい」

足で何度も蹴つても開く様子はない。去年、馬鹿力の生徒が此処を開けようと力づくでやつていたようだが、開いたといふは見たこともない。

「で、どうしましようか」

先輩の尻を眺めつつのんきにそつこつ。先輩に任しておけば大丈夫だろうからな。

「……そうだな、先に進もうか」

さつきは行き止まりだと言つていた。しかし、先輩の事だらうから何か考えがあるのだろう。

先ほどの場所にやつてきても今度は先輩のお尻に顔を埋めることなく、先輩が奥の方で立ち上がった。どうやら奥は立てるほど広さがあるらしい。

「そのまま這つて私の両足の間から頭を出し、肩車してくれ

「わかりました。先輩はどうするんですか？」

「壊れたファンを外して外に出る」

その向こう側は外とつながつてゐるようだな。いついつた行動力に惹かれて告白したのもあるからな。ともかく、今は先輩に従つておこう。

先輩の股の部分から顔を出すと言つ口常では殆どあり得ないイベントを楽しむ事もなく、俺は先輩を上に押し上げる。

「届きそつですか？」

「いや、無理だ。これから新戸の肩に足を置いて壁をつたつて昇る。私が落ちたら支えてくれ」

こんな狭いところで落ちてきても支えられるんだろうか。でもまあ、先輩が落ちるなんて事は絶対にないはずである。さて、俺らはちょっとした緊急事態に陥っているわけだ。先輩の

両足は今や俺の両肩に乗っている。つまり、俺が九十度上見ると何が見える状態だと思う？

すばり、先輩のパンツが見えるはずだ。

そして、そんなちょっとエッチな事をしても誰にも気づかれることがなんてないのだ。だって此処には先輩と俺だけしかいないのだから。

「よし、すぐに下を開けてやるからな」

結局、俺は上を見なかつた。そして先輩は昇つて行つて外に脱出できたようだつた。俺もこのまま続いてもいいけどせつかく先輩があけてくれるんだからそつちで待つておけばいいだろ？

先輩が脱出して十分が経過。

「先輩遅いなー」

目の前の鉄格子を揺らしてみるが、効果なし。気分は動物園の猿である。あ、猿は猿山だから『リラアタリだらうか？

「あれ、新戸何してるの？」

そんな時、俺の目の前に田畠がやつてきた。シユノーケルにランセル、おまるを片手に持つていてと言つ違和感ありまぐり…しかし、突つ込んでいる場合でもない。

「田畠…いい所に来たな。ちょっとこれ使って俺を助けてくれよ」
中から届かない為、工具があつても意味がない。俺はそれを外に放り出した。

「えー、どうしようかなー」

そして工具を手に持つてにやにやとした笑みを浮かべる田畠。気のせいいか、手に持つているおまるの面もそれに似ているようだつた。

「頼む」

「へえ、それが人に物を頼む態度なのかなあ？」
くつ、相変わらず嫌な性格してやがる。

「お願いします」

「助けてあげたら何してくれるの？」

「な、何か一つ言う事聞いてやるよ」

「そつかそつか、それはいい事を聞いたよ」

数分後、田畠に助け出してもらつて俺は何とか脱出する事が出来たのだった。

「いやー、今度の日曜日が楽しみだよ。朝から晚までスケジュール白紙においてよ」

そういうながら田畠は去つて行き、今度の日曜日はばつくれてやろうかと思つたりする。

「しかし、先輩はどこに行っちゃつたんだ？」

仮にも俺つて先輩の彼氏なのに…ここまで助けに来るのが遅いなんて何かあつたのだろうか。

「……ともかく携帯も鞄の中だし教室に戻つてみるか」

「新戸」

先輩の声が聞こえてきた。珍しく焦つているようだ。

「あ、先輩」

「悪い、いいわけだが生徒につかまつてしまつてなかなか開放してもらえなかつたんだ」

「いいですよ。こつちは何とかなりましたから」

「それで、今度の日曜日償いをさせてもらいたいんだがどうだ？」

「あ、すみません。その日けよつと友達と用事があるので無理です」

「そ、そつか」

まるで神様が俺と先輩の中を引き裂こうとしているかのように予定が合わなかつた。結局、先輩はその後も用事があつたようで俺は一人空しく帰路についた。

第四話・妹分、愛夏

第四話

田畠と約束した日曜日の朝。携帯電話が鳴りだしたので寝ぼけ眼で探して耳に当てる。寝起きの悪い俺としては実にすばらしい反応である。

「…………もしもし?」

『おつはよー、昨日はよく眠れたかな?』

「…………ぐつすりだよ、お前に起こされても不機嫌だ』

『そつかそつかー、じゃあ十一時にデパート前集合ね。じゃあね~』
一方的に電話は切られ(いや、別に長電話したいわけでもないが)
、俺は身体を起こす。

「…………せつかくの休日、思えば先輩から誘われたと言うのにこっちを優先してしまうなんて俺はなんて律儀な人間なんだろうか」

某青狸の『半分小刀』があれば両方に受けたんだけどなあ~テクノロジーの進歩と言う奴はローマの一歩みたいでまだまだ先のようである。

自室から出て顔を洗い、一階へと降りる。テクノロジーの進歩があれば階段も自動になつて……いや、瞬間移動でいいけるか。

「風太郎、愛夏ちゃんが来てるわよ

「おはよー、兄貴」

リビングには母さんと親戚の愛夏がいた。休日だと言うのに愛夏は制服姿である。新戸愛夏、結構遠い親せきにあたるんだが、幼少のころから住んでいる地域が同じなために小、中、そして高校共に一緒である。兄弟のいない俺の妹分だ。ちなみに、子分とかそんな感じではなく妹分(貴重な俺の妹成分)である。意味がわからない?つまりは心のよりどころみたいなもんだ。

「あれ、今日は休みだろ?」

「うん、そただけど兄貴に制服姿を見せたかったんだよ

じゃーんとか言つてくるりと一回転。スカートがひらひらなつて可愛い。さすが俺の妹分である。

「制服姿つて、入学式に一緒に写真撮つただろ?」

「違うよ、同じ学校なのに兄貴が会いに来てくれないからしつかり見てもらつたために来たんだよ。なんで会いに来てくれないの?」

「そりゃまあ、用事もないのに一年の教室には行けないだろ」

えー、ちゃんと愛夏に会うためつて言つ用事があるじやん……なんて言われる前に俺は口を開く。

「お前が会いに来ればいいじゃないか」

「あ、そうか」

来てもらつても困るんだけどな。おもちやを見つけたら絶対に喜ぶような奴が約一名、俺の近くにいる。ともかく、この場をやり過ごせたからよしとしよう。

「母さんちょっと買いたい物に行つて来るかい」

「いつてらつしゃーい」

「母さん、シャンプーと歯磨き粉が無くなりそうだからひりこへ」

一人で母さんを見送つて俺は席に着く。

「朝まだだよね?」

「ああ」

「何か作つてあげようか?」

「頼むよ」

「りょーかい」

台所に立つ愛夏を尻目に俺はテレビのスイッチを入れる。

「そりいえばさ、兄貴…とうとう加賀美生徒会長に告白して、しかも成功したんだよね?」

「ああ、何とかな」

「よかつたじやん。妹分の愛夏としてはふられぬまつに賭けてたんだけど残念だつたよ」

「そこは嘘でもいいから成功する方に賭けてくれよ」

偉い政治家さん達が色々と議論している。俺からしてみればどう

せどつかと癒着とかしてゐるんだろうと思つたが、自分がもしも政治家になれた時に癒着とかを話題に持つて来られるとテレビの中の政治家と同じで文句を言つて事間違いないだろ？
「でもなあ、ちょっと問題があるんだ」

「どうかしたの？」

「告白したその日に中原美奈子つて言つクラスメートに告白された」「当然断つたんだよね？」

「そうだよ、世間一般的に言つて普通ははつきりと断るだろ？
「あ～……適当に『友達からお願ひします』つてやむやむにしておいた」

がたん、という音が聞こえてきて俺の皿の前に裏返された田玉焼きが綺麗に着地した。まあ、黄なみがつぶれちゃったけどな。

「愛夏、いつの間にかこんなにすごいスキルを身に付けたんだな。
お兄ちゃん、感心しちゃつたわあ～」

血相を変えた愛夏がこけそうになりながら俺の視界に入つてくる。

「あ、兄貴つ、それはまずいと思つよ！」

Hプロン姿が可愛い愛夏が俺の前の席に座つて失敗した田玉焼きを片づけた。

「……やつぱりまずいか？」

「そりやそりやつ……ばれたりしてないよね？」「
「大丈夫だ。どっちにもばれたりしていいから」
しばらく愛夏は考へているようだった。

「どうするの？」

「どうするつて、いや、どうにもできないから愛夏に相談してみた
んだ」

「兄貴つてば変な事をよく引き起しすよねえ。去年は下着泥棒に間違えられて女子から総スカン喰らつたんだって？」

「あれは冤罪だけどな。後日ちゃんと謝つてもらつたぞ」
愛夏は未だ考えてはいるようだった。

「もう、あれだよ。どうせ加賀美生徒会長も兄貴の事を知り合いで

から断つたら関係悪化しちゃいそうだし、仕方なく付き合つてあげてるのかもよ」

「そ、そりかなあ」

「うーん、でも、そのクラスメートの中原美奈子って人もこれと書いて取り柄のない兄貴に魅力を感じてるのかな……」

「おいおい、取り柄のないって……」

「じゃあどんな感じで告白されたの?」

愛夏に言われて思い出そうと頑張つてみる。

「好きだから付き合つてほしいうて感じかなあ……」

「怪しい……もしかしたら兄貴の遺産が目的なのかも」

「俺の家は別に裕福でもないだろ」

「いや、もしかしたら兄貴に秘めたる能力があつてそれが目的で……」

「はいはい、愛夏、さっさと朝食作つてくれよ」

「はーー」

いまいち真面目にやつてくれないのは俺の性格が似てしまつたからだろうか。

「でもさあ、どうするの?」

「どうするのつて、そりややつぱり先輩優先だろ。いつかちゃんとと言わないといけないことだ」

セリフだけだと格好いいけどやつてる事は最低だよねえと言われた。確かにそうだけどな、優柔不断な自分が悲しいぜ。

「兄貴がそれでいいって言うのなら愛夏も何か手伝つよ」

「おう、その時はよろしく頼む」

これまで困つた時に愛夏が助けてくれると大抵失敗に終わる。しかし、くじけてはいけない。数多くの失敗を乗り越えて成功と言つものは顔を出してくれるのである。

第五話・田畠焰との友情

第五話

田畠との待ち合わせ場所に十分前到着完了。

「や、新戸」

「お前にしちゃ早かつたな」

「そりやそりや。だつて家の前集合に変えたんだからわ」「昼飯を取っているときにメールが来た。『集合場所はあたしの自宅に変更』という内容である。

「しつかし、相変わらずおしゃれさんだな」

「身なりはちゃんとしないと駄目なんだよ」

Tシャツジーパンの俺とはだいぶ違う。男っぽい見た目の服装の為に女子に入気の田畠焰。これは噂だが、男子の中で彼女を盗られた奴がいるとかいないとか……。

「で、俺は何をすればいいんだよ」

「実に簡単なことだよ」

こいつの簡単は九十超えるおばあちゃんが逆立ち町内一周をするぐらいの難易度である。

「さつさと内容言ってくれよ」

「それは着くまでのお楽しみだからね」

あ～あ、どんな事が起こるかもわからないのに安易に助けを求めたのが失敗だつたな。あとちょっと待つていれば先輩が助けに来てくれるで今頃デートしているはずだつたのに。

デパートについて俺と田畠が向かつた先は女性用下着売り場。何、田畠だつて身なりは男っぽいが脱がせば女子である。ブラにぱんちーは必要だらう。ちなみに俺一人がこの売り場に入ると女性店員から変な顔をされること間違いなし。この前なんてアマチュア作家の人があの店員さんに連れて行かれていたからな。

「いや、違うんです。俺は別にそういう目的で来たわけでは……」

小説に使うネタですよ」

あれは可哀想だったな。同じ男として合掌しておいた。

「で、此処で何するんだよ?」

「決まってるよ

びしつと右手で指差してくる。

「下着を買つてきてもらうんだっ」

「……はあ? あのな、俺が買いに行つたら連行されるぞ」

「そこは大丈夫、ここにあたしがいるからさ」

にこやかーにそう言われる。そして親指立てて俺に囁つのだつた。

「がんばっ

「ちつ、しようがねえな」

足取り重く、店員さんに田をつけられない様に手近な下着を手に取る。

「上下セットで頼むよ」

「へいへい」

サイズは適當でいいのか? ブラジャーとか付けたことなんて一回もないからわからんぞ。知り合いの中に標準的な人物がいるかどうか……愛夏は胸ないしな、先輩は結構あるし、そういうえば俺は女子と一緒に来ているんだからそいつに買えって言っているんだから基準をそいつにすればいいな。

じーっと田畠の方を見る。

「何、どうしたのさ?」

にやにやしているところをみると俺がなんで田畠の事を見ているのかわかっている節である。

「……すまん、田畠

「失礼だよ

「すまん、すまん……」

愛夏と変わらないぐらいだった……ええい、こうなつたら適当に上下セットで買えばいいはずだ。

男らしくブラジャーを掴み、パンツもつこでにあさる。

「あれ、風太郎君？」

「どこかで聞いたことあるような声が耳に入ってきた。回らぬ首を無理やり回して声の主を視界にとらえる。

「な、中原さん…」

「……なんで風太郎君がブラジャー鷺掴みしているの？」

「ひついう時、変に緊張したりしてはいけない。いつもと同じようにふるまえばいいのだ。

「田畠に頼まれたんだよ。下着上下セット買えってさ……あれ、いねえ」

「田畠さんに？」

「ああ、諸々あつていわば罰ゲームつてやつかな。でも、いなくなつたし戻してもいいだろ…」

「あの～お客様」

「はい？」

遂にきたか……連行されたらどうなるんだろう。

「さすがにそこまで力強く握られたものを返されでは困ります」

「え、あ、ああ……すみません。これ、買いますから」

愛想笑いを浮かべながらレジまで持つていく。もちろん、ぱんちーも買つたさ。ああ、着用しない女性用下着をそれはもう堂々と買ってやつた。

「ママ、なんで男の人なのにぶらっじゃー買つてるの？」

「よく見ておきなさい。あれが変態予備軍よ」

もう一度とこのデパートには来れないやと思いつつお金を払う。それなりに高かつた……でもまあ、中原さんが近くにいてくれたおかげで精神的に楽だつた。

その後、逃げるようになってその場を後にしてデパート内の飲食店に入る。本格的なコーヒーのあのお店である。

「それでその下着どうするの？風太郎君がつけるの？」

「まさか、つけるわけないよ」

「じゃあそれ、あたしにくれないかな？」

愛夏にでも上げようとかと思つたが、Jのカイズじゅりゅと愛夏には大きこしなあ。

「ここよ。あげる」

「お金、払おうか?」

「いや、いい。はいどりや」

紙袋を中原さんに渡してため息をつく。

「しつかし、田畠のやるべJに行つたんだろ」

「せつと急に用事が出来たんだよ」

「やうかなあ」

「だと思つむ」

本当にやうなんだるゆか、でもいないんだからその通りなんだらうな。後で聞いておくとしよう。

「Jの後暇なら一緒にカラオケでも行かない?」

「ここよ」

結局、Jの後中原さんと休日を廻^{まわ}したわけだ。悪くはなかつたし、女の子とデートなんてラッキーだなと思つたわ。でもせ、やつぱり先輩とトークしたかった。

第六話・日常風景となつた事

第六話

先輩と俺が恋人関係になつて一ヶ月が経つた。特に報告するような進展はなく（眼と眼があつた、手と手が触れたとかそんなの）、たまに俺が先輩の仕事を手伝うくらいだ。変わった事と言えば夏服との衣替えが始まったのと、中間試験がそろそろ迫つてきているぐらいか。

「はい、風太郎君お弁当」

「ああ、ありがとう」

撤収していく中原さんに手を振つていると田畠が顔を近づけてくる。

「日常風景になつたねえー」

「そーだな」

最初の頃はちょっと悪いかなと思つたんだけど、最近じや何とも思わなくなつてきていたりする。ちょっとやばいか？いや、別に彼女つてわけじゃないんだし、何かあつたと言つわけでもない。

「新戸君、今日の日直ですから早く黒板消してください」

「わかつてるよ。飯食つた後じやないと粉が飛ぶだろ」

「ちゃんと消しておけばよかつたと思います」

中州に文句を言われつづ机をくつづける。

「そうだよ、全部新戸が悪いに違いない」

「…お前も一応日直なんだぜ」

「大丈夫、あたしはちゃんと職務を果たしたから」

「はあ？」

「学校に来た、それが日直の仕事」

「…」

「…いつに何を言つても無駄だな。

弁当箱を開けようとすると、もうひとつ机を引っ張つてくる人物

がいた。

「あたしもお邪魔します」

「中原さん……」

「一緒に食べようと思つても。やつぱり、食べてる人の顔もみたいかなーって思つて……駄目、かな?」

ちょっとおどおどした感じがいつもと違つ。

「中州君っ」

「はい?」

「わたしたちは邪魔だから、別のグループのお世話にならつ」「そうですね」

教室と書つ小宇宙の中で作られた宇宙ステーションはあつという間に解体、独立して別の場所へと移つて行く。俺は取り残されてしまった。

「『めんね』

「気にしなくていいって」

「うん、じゃあ気にしない」

俺の真正面に(どうでもいい事だが目の前はいつも田畠)陣取る。ぼーっとしているのもあれなので弁当箱を開けた。

「あれ、今日は箸が入つてないよ」

「え? あ、あ~ ……『めん。忘れちゃつたみたい

中原さんが忘れるなんて珍しい事もあるんだなあ。箸が無いのならちょっと遠いけど食堂まで行けば借りてこられるからな。

「あ、ちょっと待つて」

立ち上がつた俺の腕を中原さんが掴む。

「どうしたの?」

「えつとせ……えーっと、この前田畠さんがお弁当忘れてた事あつたでしょ?」

「ああ」

約一週間前に田畠はお弁当を忘れ(さらに財布も忘れていた)、俺と中州から昼食を分けてもらつたのである。

「あつたな。それがどうかしたのか？」

「うん、風太郎君がお箸で食べさせてあげてたよね、だからあたしが食べさせてあげるよ」

「え、あ、いや～…」

一週間前、田畠の奴は弁当のふたの裏におかれたおかずをじーつと見ており、俺に目で何かを訴えていた。

「どうした、それだけあれば充分だろ？」

「うん、じゃあどうやつてあたしは食べればいいのさ？」

「そりゃ箸借りてくれればいいだろ」

「面倒だよ。新戸へ食べさせてよ」

「……しうがねえなあ」

何だか犬に餌をあげている気分になつた。

ともかく、あれはもらつていてる側としてはずゞゞはずかしいのではないだろうか。

「いや、やっぱり恥ずかしいって」

「でも、あげてるときはまんざらでもない顔をしてたよ？」

「そりゃ、やつている方は何ともないだろ？」

「じゃあ、はい」

手渡されたのは箸だった。

「風太郎君があたしに食べさせてくれればいいんだよ

「……なるほど」

さすがクラス委員長も務める中原美奈子さんである。その考えにはいたらなかつた。

「あれ、いいんだ？」

「ああ、これなら別に恥ずかしくもないからな」

小さい頃は愛夏によく「うやつて食べさせてやつていたもんだ。好奇心丸出しで周りが俺達の事を見て来たんだが、そんなにおかい事をしていただろうか？」

「ふう、じちそうさま」

「御馳走様、弁当にお箸、ありがと」

「いえいえ、風太郎君に喜んでもらうためにもつとお料理頑張るね
面と向かってそう言わると恥ずかしい。いや、悪い気はしない
んだけどな。しかし、ずっと弁当を作ってきてもらいつのもいけない
だろ。

先輩と俺は恋人で、中原さんとは友達のはずなのにやっている事
はまるで恋人みたいなことである。それとも、世間一般的な友達関
係ってこんな感じなのだろうか。

第七話・広がる事実

第七話

中間テストが始まり、すぐに終わった。それ以上でも以下でもない、勉強しているものはそれなりの点数を手に入れますますです

「相変わらず安定して満点揃えてるな」

「ええ、努力の賜物です。次回も頑張らなくてはいけません」

勉強もせず、友人を無理やり誘つて遊びに行くような愚か者にはそれ相応の点数を授けるいわば通過儀礼…

「ええ～なんで新戸は一つも真っ赤な点数とつてないの?」

「そりやまあ、お前と違つてちゃんと勉強しているからな」

「だつて、一緒に遊んでたじゃん」

「家に帰つてちゃんと勉強したんだぜ?くくく、まあ、期末で頑張る事だな。じゃないと夏休みは補習漬けだ」

「ぶーっ」

「中州、こいつに勉強を教えてやつたのかよ?」

「ええ、ちゃんと教えましたよ」

眼鏡をついつと上げて俺の質問に答える。

「ですが、僕の勉強方法と田畠さんの勉強方法は違つたようで受け入れてもらえたかったのです」

「だつて中州君の難しいんだもん」

こりやまたとんだ問題児である。一年の頃は隣のクラスだったからこいつの点数は知らなかつたけどまさか赤点常習者だったとはな。「今度は新戸君が教えてあげたらどうですか?」

「ええ～俺が?」

「ええ、だつて田畠さんの友達でしょ?」

「友達じゃない」

「呪つてやる。わたしは残りの人生を全部新戸風太郎の事を呪つて

生き抜いてやるつ

まるで親の仇を見るような感じである。

「でもよお、俺は中州より頭悪いぜ？」

「いえ、教える程度ですから大丈夫ですよ。」こうしたものもやはり阿吽の呼吸が無ければいけません。この前のテニスの授業でもいかんなく発揮されていましたが?

「どうだか…テニスと勉強は違つと思つけどな」

「ともかく、僕が教えたのだから今度は新戸君が教えてあげてください。友人が夏休みの補習に参加しなくてはいけないのは見ていて辛いですからね」

「じゃあ中州が教えてあげてくださいやいいんじゃねえのん?」「順番ですからお願ひします」

「ちえ~」

愛夏に勉強を教えるのならともかく、何故に同級生の勉強を見てやらねばいけないのだろうか。期末まで時間があるからいけど、そろそろ始めるといつの場合にはまずいんだろうな。

とりあえず放課後、中原さんに一緒に帰らないかと言われる前に（最近よく誘われる…部活があるだろに）図書館に連れ込んだ。「ちょ、ちょっと新戸、こんな人気のないところに連れ込んでどうする気?」

「くくく、想像に難くないだろ?」「…」

「わ、わたしをむいてあんなことやこんなことを…」

「そうだな、とりあえず返してもう一回答案用紙を全部出してもらおうか」「…」

アホに付き合つてやるのは一行だけである。

「日本史は自信あつたんだけどね。満点かと思つたんだよ?」「無い胸張つてどんと呴く。

「ああ、そうだな。一問ずつ上にずれていれば合計で九十六点だった」

「でしょー?」

結果論である。最後の文章問題の欄に『一問ずれとは定番ですね、次回は頑張つてください』と先生からの言葉が書かれている。

「落ち着いて解けよ」

「反省してます」

本当にしているのだろうか？俺がこいつの点数を心配してやる義理はないんだけどなあ。

そのあとも悪かった答えは何処か調べ、基本から問題を解かせてみた。

そんな時、加賀美美奈子生徒会長が図書館にやつてきた。

「新戸、こんなところで何をしているんだ？」

「見ての通り友達の勉強を見てやつてるんです」

「ほお、それはいいことだな」

俺の希望は『先輩、俺と一緒に放課後期末テスト対策しましょう。わからないところ教えてください』で色々と進展するはずなのに現実はアホとのお勉強会だからな。

「ども、新戸の親友の田畠焰つてありますっ」

解いておくようにと言つた問題をやめて俺の隣にやつてきていた。そして、自己紹介をして握手を求めていく。

「ああ、これは丁寧にありがとうございます。私はこの高校の生徒会長、加賀美美奈子だ。一応、新戸の彼女でもある」

握手を満足いくまで堪能し、放した後田畠はしきりに驚いていた。そりや そりや そりや そりや まさか先輩が初対面の相手に対して『彼女だ』と言うとは思いもしなかつた。

「へえ～」

「意外か？まあ、私のような女では新戸も物足りないだろうがな」

「そんなことないです」

「ふむ、そうか…おっと、私は用事があるから失礼させてもらひますが、新戸、また今度だ」

「ええ、がんばってください」

一冊の本を掴んで図書館から出て行つた。受付顔パスとかさすが

生徒会長である。

「さ、俺たちは勉強に戻ろうか。それ終わったら今日は終わりだ」「うん、わかった……ところで新戸」

「何だよ?」

「一緒に帰ろうよ」

「ああ、いいぜ」

どうせこの後部活に行くわけでもない。部活に入つてないのだから。

たつた一問の問題を解くのに數十分かかった友人をどうしたものかと思案するが答えは出ない。いつそ、家庭教師でもつけたほうが（十人ぐらいいればいいかな?）いいかもしね。そんな結論が出たところで珍しく黙つていた田畠が話しかけてきた。

「あのや、新戸」

「何だよ」

「あれつてどういうこと?」

「あれ? あれつて何だよ?」

「さつきの生徒会長が言つていた事。彼女だつて言つてたけど?」

「あ、ああ、あれか。あのな、実はだ……」

俺はアホでもよくわかるように説明しておいた。

「つまり、二股かけてるつて事だよね?」

「いや、大丈夫のはずだ。まずは友達からお願ひしますつて言つているからな」

「……はあ」

「何だよ…その人を馬鹿にしたようなため息は」

夕方でもそれなりに暑く、日もまだ強い。そんな最中、田畠は途中で歩を止めた。車が一台田畠、俺を追い抜いて行く

「どうしたんだよ

「おんぶ」

「おんぶ? 何わけのわからない事を言つてるんだよ。暑さで頭やられたんじやねえのか?」

両手を俺の方へと突きだしている。しかし、ちやんとおんぶしてしまつ自分が悲しい。

「あのや、新戸。一一股してゐるつて事がどちらかにばれたらどうなるかわかつてゐの？」

後ろからそんな声が聞こえてくる。

「ばれるつて、なんでばれるんだよ？まだばれてないぞ」

「わたしのことを適当にあしらつたり、のけものにしたら今後ポイントがたまつて見事満点になると……なんと……」

ポイントの溜まる方法がまるでマジみたいである。

「何かもらえるのか？」

「中原さん、そして加賀美生徒会長に一股している事をばらします

「……」

「新戸、おんぶして」

「してるだろ」

「うん、でも大丈夫だよ」

「何が？」

一呼吸置いてさつきよりも小さい声が聞こえてきた。

「中州君と、わたしは多分、そんな人類の屑みたいな新戸と友達でいてあげるからさ」

「そりやどうも……しつかし、お前重いなあ～いたつ」

「そりやそうだよ。だつて二人分の鞄持てるんだから

「あーはいはい、そうね、だから重いのね」

田畠が中原さんにぼろつとこぼす確率九十パー超え。辞世の句でも考えたほうがいいんじやないかと真剣に悩んでいる俺…これが青春なんだろうか?それに、悩む事はまだあつて先輩の誕生日も近いのだ。

第七話・広がる事実（後書き）

どうも作者の雨丸です。長期連載をする予定は今のところありますので適当に読んでもいいのがいいかもしません。今回の報告は以上です。

第八話：プール掃除

第八話

五月はこれといって特徴的な事もなく（いや、田畠に一股っぽくなっていることがばれたが）、六月。

梅雨時、しかしながら体育は水泳も入ってくるわけでプールの掃除があつたりするわけだ。我が羽津高校では生徒会がプール掃除を行つのが伝統だかなんだかで、俺も呼ばれていたりする。

「手伝わせてしまつてすまない」

「いえ、別にいいですよ」

何せ、プール掃除を制服でするわけではないからな。うん、スクール水着とはいえ、水着である。しかも、今年の生徒会は『女の園』と呼ばれているぐらいで男子生徒は入つていないので。

「ふむ、そうか」

「新戸君も喜んでいいようですし、手伝つてもらいましょう」会長 加賀美生徒会長と双璧を成すと言われる浅野副生徒会長。眼鏡で、長髪にバンド、脱いだらすごいと何故だか知れ渡つている人である。しかも…

「新戸君、ご褒美ですよ」

素晴らしい絶景を見させてくれるよう胸を協調させるようなボ

ーズをとつてくれる。まあ、サービス精神旺盛なのだ。

しかし、しかし…あれだ。隣は生徒会長なのだ。俺が現をぬかして居たら怒つたりするんじゃないだろうか？

「あれ、やっぱり彼女さんからしてもらつたほうがいいのかな？普通だったらだらしない表情見せてくれるんだけど…顔色うかがつているようじや駄目ね」

「あ～…はは」

先輩の方を見るけど特に何とも思つていなかった。ちょっとばかり、さびしかつたりする。

「会長」

「何だ？」

「いつも公私ともに新戸君に手伝つてもうつてこますよね?」

「ああ、そうだ。そうだな、新戸?」

「え?ええ?」

いわば先輩の第三の腕と言つたところだらうか?いや、会長の下僕と言つてもいいかもしれない。

「お礼とかしてないんですか?」

「失礼だな。ちゃんと手伝つてもらつたら『ありがとうございます』と書つていいだ?」「

「いや、そうじゃなくて…」

しばらぐ悩んでいた副生徒会長は浅野生徒会長は俺に近寄つてくる。「な、何ですか…よからぬ事を考へていてる。手を合わせておいた。

後ずさりで逃げられる距離にも限界があり、かかとに何かが当たつたところで終わつてしまつ。俺の顎に手を這わせ、胸を押しつけ、足を絡めてくる。

「新戸君、いつもありがとう…キスしてあげるね」

「え、ええ?…」

いや、冗談だつて言つのはわかってるんだけどな。ま、やつぱり男つて心の奥底で『いけるかも、いけるかもしれない』って思うときあるじゃん?人前つてわかつていてもやつぱり期待しちゃうもんだよ

そういうえば、先輩も近くにいたんだっけか。

先輩のいる方へと視線を動かすが浅野先輩も身体を動かして見えない様にしていた。

「あら、やつぱり彼女の方が気になるの?でもね、今日に映つているのは私だけでしょ?違つかな?」

「ち、違いませんつ」

「じゃあ、田を閉じて」

「……はひい」

言われるままに田を閉じる俺。きっと飴ちゃんあげるからと言わ
れただけでほいほいと暗がりに連れて行かれてしまうのだろう。

そう、俺一人だけなら確実に連れて行かれるだらうな…残念、先
輩が近くにいるのだ。

「そこまでだ、そういうのはよくないぞ」

副生徒会長の後頭部を引っ張つて俺を解放する。

「大丈夫か？」

「え、ええまあ」

ちょっと惜しいかと思いつつ、そういうた甘い考えが中原美奈子
との間柄を未だ解消できていない要因なのだと冷静に分析してみる。
「大丈夫って、別に何もしてませんよ。ちょっとちゅうしょうつて
思つただけです」

「校内では禁止されているだろう」

「ちょっととぐらいいいじゃないですか」

「駄目だ。絶対に新戸には手を出さな」

「へえ～会長がそんな事を言うのは珍しいですね～」

「当り前だ、新戸は私の彼氏だからな」

胸を張つて言つてくれる先輩が神様に見えた。気のせいか、後光
まで見えたりする。

「じゃあ会長のいただきますっ」

「む、むぐぐ……」

何と、あらうことか田の前で先輩の唇が副生徒会長に奪われてしまつた。そのまま先輩はぺたんと尻もちをついて副生徒会長に押し倒され……

「ふつはあ～……御馳走様でした」

「お、女の子同士で……」

ゆらりと立ち上がる副生徒会長。先輩は放心状態で青空を眺めていた。ファーストキッスが奪われたわけだが、なんだか微妙な心境である。

「さて、次は新戸君の初めてをもうひやおうかなあ？」
先輩を心配している場合ではなかつた。口元を歪め、両手を顔の横でいやらしく動かしている。

「、このままこじこじると……やられるつ……いや、むしろ轟うちれるかもしねん。

「待てええ～」
「ひいいいいーっ

デッキブラシを振り回しながら追いかけてくる副生徒会長。俺は他の生徒会員を間を抜けたりして逃げ回つた。

その後、復活した生徒会長に仲良くゲンコをもうひて説教され、大人しく掃除を終えたりする。最後の後片付けは俺と先輩で終わらせ、プールサイドでちょっと話をすることにした。

「ふいー、疲れましたね

ふいー、副生徒会長につかまつて突かれなくてよかつたわ、いや、まじで。

「新戸」

「はい？」

「その、色々とすまない」

「ああ、副生徒会長の事ですか。いいですよ、それなりに楽しかつたですし

「いや、これまでのお礼の事だ」

「お礼ですか？」

「そうだ。言葉だけで事足りると思っていたのは長い付き合いだから

らかもしれない」

「副生徒会長の言つていた事を気にしているですか？俺は別に気にしていませんけど」

むしろ先輩の方があんな人前で押し倒されて濃厚なキッスされるとか精神的にくるんじゃないだろうか？考えてみてほしい…同性にいきなり押し倒されて唇を奪われるとか一度と校門をまたぐ事はないだろう。

「お礼をしたいと思う」「ひう

「お礼ですか？」

「ああ、浅野がお礼だと言つていた事をしようと思つんだ」「え、えーと…」

もしかしてキス…いや、そうに違いない。

期待した目で先輩を見たけど、両手を振りたくって顔で思いつきり否定していた。

「違うぞっ、ポーズの方だ」

「ポーズ…ですか？」

「あ、ああ…ほら、男子はそういうつたポーズをとつてももうのが好きなようだからな。よく浅野は男子生徒の前でポーズをとつてている。新戸はどんなポーズをしてもらいたいんだ？」

いきなりそう言われたつて困る。いや、キスの心の準備をしていたのにそれは困る。まあ、そんな事だろうとは思つてたさ。うん、先輩が俺に悩殺ポーズをとつてくれるなんて今後あり得ないだらうからな。

でも、品行方正な先輩がポーズをとつたところできこじちない感じで（それはそれでいいけどさ）俺の方が申し訳なくなつちまうよ。

「…気持ちだけで十分です。じゃ、俺は帰りますんで…お疲れさまでした～」

浅野副生徒会長のポーズはマジですか？！背筋をぴんと張らせるような感じだったし、猫背も一発で直るぐらいの凄さだったのである。あれを見た後ではどれも駄目に見えてしまうだろう。

帰ろうとした俺の腕を先輩が掴んでいた。抱きつくような感じで。「待つてくれっ、つまり新戸は私に女としての魅力がないと言ったいんだな？」

「いや、そうとは言ひてませんよ。十分すぎますって」殺傷能力を持つていそうな胸とかな。ま、それとこれとは話が別だ。

「気が済まないからお願ひだ、何か指示してくれ」

「……わかりました。でもどんなに恥ずかしいポーズでやってくださいよ？」

「ああ、もちろんだ。絶対に成し遂げて見せる」

少々、心苦しいが此処まできたら手加減と言つ奴は逆に失礼である。俺は先輩の身体を触りながら指定したポーズをすぐに完成させた。

「一、二、三うか？」

「そう、そうです。多分、先輩のそのポーズを見る事が出来るのは彼氏である俺ぐらいなのです。みた人を釘づけにします」

品行方正な先輩がまさか『シェー』のポーズをするわけがない。先輩が一度とシェーすることもないだろう。

俺は先輩の恥ずかしいポーズをしっかりと目に焼き付けておいた。

第九話・波乱の回避

第九話

今ではかなりの数が普及された携帯電話。中学生だつて持つているし、小学生の中にも所有している子もいる。もちろん、高校生の俺も持つていて、大抵の生徒が持つており、学校に持つてきているだろう。

ただまあ、前提と言つか、『教師の見ている前では使用してはいけない』、『使用が許されている場所だけでの使用』といったものが決められている。通話がしていい場所は職員室を抜けたベランダ、屋上（立ち入り禁止となっている）の二か所だけだ。

ルールが守られなかつたらどうなるか？決まつていて…罰を受けるのだ。

「新戸、生徒会室では使用厳禁だ」

「え

「没収だ。反省文を書いてこい」

たとえ知り合いと言えど、彼氏と言えど、手加減するつもりは毛ほどもなかつたようで俺から携帯電話を取り上げた。ちょっと氣を許しすぎたかもしれないと思つて大人しく引き下がり、反省文を書く為に紙をもらつたわけだ。

「私の彼氏だからな。一枚増やしてやろう」

「……ありがとうございます」

全く、嬉しくない。

六月の中盤、俺は携帯電話を数日間使用不可にされたわけだ。使用不可にされた事に腹を立て、親が学校に乗り込んでくるとか冗談にも程がある。

「それは風太郎が悪いんでしょ？はやく反省文を書きなさい」

「へーい」

夕食時でも母ちゃんにそう言われた。そりゃそうだね、学校の

事に親が関わつてくるなんて後ろ指さされるレベルである。モンスター・ペアレンツの友人なんて誰ももちたくないだろ?だからなあ…中学生の頃そういうった奴がいたけど、ものの見事に隔離されてたな。家で反省文を書くが、書き終わらざるに学校で書くことにした。「……まあ、特にメールとか送つてくる奴がいるわけでもないか」

「最近、電話もメールも母ちゃんからが多い。先輩とは恋人のはずだが、携帯での関係は必要事項のみという何とも素つ気ないものだつたりする。一応、先輩にも言い分はあるようだ『気持ちが伝わらないだろ?』との事である。

朝のHRが始まるまでに書き終えようとすると、埋まらない。

「新戸おっはよ~」

「おはよ~」

元気の塊みたいな奴が入ってきた。反省文を指差しながら薄っぺらい鞄を自分の机の上に放り投げてこっちに近寄つてくる。

「あれ、ケータイ取り上げられたんだ?」

「ああ、先輩にな」

「先輩……生徒会長さんかあ。相手が新戸と言えど、手加減しないんだねえ……でも当然か」

「なんで当然なんだよ?」

「やつぱりきつちりして欲しいと思つよ。新戸なら尚更ね」

「……そうかもなあ、ちょっと気が緩んでたわ」

「で、どんな事書いてるの?見せて見せてつ」

「ほら」

使用した事を素直に悪いと認めた文章が続いているだけである。受理されなかつた場合はボランティア活動に参加せねばならない為に一発で合格を目指さなくてはいけないのだ。別に活動に参加してもいいけどな。

「面白くないね」

「反省文が面白かつたら問題だろ」

「うーん、そうだね。でもこう書いておくといこよ……ほら、こん

な感じ」

しおりちゃん取り上げられていそうなイメージがある為に反省文は自信あるんだろうかと見せてもらつた。

「……『社会が悪い』って絶対に駄目だ」「そりゃあ、学校が悪い、ひいては生徒会長が悪いんだって言えば嫌われるだろうし」

「嫌われちゃ駄目だろっ」

「いいじゃん。一人もいるんだからさー、一人ぐらい失つても」「本命は先輩だから絶対に駄目だ。つたく、邪魔しやがつて……」社会が悪いと言つ文字を消していくと中州が入つてくる。

「おや、携帯電話を取り上げられたのですか？」

「そうだよ、反省文書いてるんだ」

「どれどれ……これならすぐにつき合えますね」

「そつか、お前に言わるとほつとするよ。どつかのアホと違つてな」

「むつ、わたしは別に間違つてないもんつ」「うきなり黒板前に移動し、教壇を両手で叩いた。

「皆の者つ、携帯電話を別に授業中に扱つたぐらいで取り上げられるこんな校則、我々の手で買えようではないか~」「ん、何だ何だ？」

「また田畠のアホが騒ぎだしたようだな」

「クラスメートからもアホ扱いとは……可哀想な奴だ。いつものように騒いで終わりだらうかと思つたらそれともないようでみんな田畠の言葉に耳を貸していた。

「そうだよなあ、確かにおかしいもんな」

「別に休憩時間とかちょっと触つてもいいよなあ」

「この学校に革命を、わたしとともに、みんなで起します。田畠はみんなの住みよいいかつ」

「おー」

「ありがとうございます。田畠はみんなの住みよい

学校へ変えようと思つています

「いいぞ～」

「もつとやれ～」

盛り上がつてゐる中、俺の反省文は何とか完成した。アホに構つていなくてよかつたからかもしれないし、中州がアドバイスしてくれたからかもしない。そして、とある声が発せられたところでこの集会は一気に静まり返つた。

「ちょっと、何の騒ぎ？」

クラス委員長である中原美奈子の声だつた。俺に対しても優しいが、じうじつことに関しては厳しい。教師から『このクラスは静かで、教えやすい』と言われるのも全てこの中原美奈子のおかげなのだ。きっといなかつたら暴れん坊クラスの名をほしいままでしていた事だらう。

「お腹が急に痛くなつたで～」
「急性お腹痛で～」

「おお、お主もか。拙者もで～」
「なかなかきわどい状態で～」

る

「では共に参りつか？」

「拙者もついて行くで～」

「では皆で廁に参りつか？」

「そうするで～」

「あら、

男子のほとんどが中原さんに睨まれながら出て行つてしまつ。

「田畠さん、こいつ事はあまりしない方がいいよ

「え～なんで？」

「いづれ休憩時間だけじゃなく、授業中に使う生徒が必ず出るわ。

だから駄目」

「ちえ～、校則を変えたら新戸が喜ぶと思つたんだけどな

「それはなんでそう思うのかな？」

「新戸、携帯取り上げられちゃつたんだよ」

田畠がそう言つと話をやめてこいつにやつてくる。

「風太郎君が田畠さんにこいついたの？」

「え？ 何が？」

中原さんの手が動いたのも一瞬、そして俺の頬がいい音たてて突つ張られたのは一瞬の出来事だった。

「ちょ、ちょっと新戸に何するの？」

田畠が食つてかかるけど、あいつたと押しのけられて『あ～れ～』とか言いながら飛ばされていった。

「…風太郎君、あたしは普通の学校生活が送りたいの、その邪魔をしないで」

すつごい迫力である。逆らつたらすーっと持ち上げられて爆破されそうだった。

「え、あ、ああ…悪かった」

「わかつてくれたのならいいよ。許してあげる」「

中州なんていつの間にか隅っこの方に逃げておびえてるし、他の女子もびっくりしているようだつた。

中原さんはそのまま鞄を持って自分の席に着席。いやーな空気が流れ始めたので俺は教室を出る」とこした。

「新戸お～じつによき響きだ〜」

「イライラがすかつと消えたで〜」

「新戸のおかげで〜」

「〜やる〜やる

「いや、俺がぶたれたんだが？」

「ぶたれるのは誰でもよかつたで〜」

「どうで〜やるか？ 彼女にぶたれた感じは？」

何だこの御座る口調は？

「あのなあ、あの一撃は迷いのひとかけらもなかつただろ〜」

「確かに痛快で〜やつた

「やつで『じやるわ』つまつ、拙者の事よりも校則の方が大切と言つのがありありと書つことで『じやる』」

「その通りで『じやる』な。つまり、貴殿は彼氏ではなく、校則の方が

彼氏と言う事で間違つておらぬとこつことで『じやる』か」

「その通りで『じやる』。つまりは、中原美奈子殿と拙者の間柄は不良に切れるクラス委員長という構図だつたと言つわけで『じやる』よ」

まずは外堀から埋めて行く事としよう。俺と中原さんの仲をなかつたことにするには少々時間がかかるかもしれないがこういった偶然を積み重ねて行つてゴールに向かうしかない。

意外と早い段階で無かつた事に出来るかもしれないと思った俺は浅はかだったのかもしない。

俺がぶたれたその日の一時間休み時間。俺は中原さんに連れだされていた。

彼女は泣いていた。

「本当、本当にごめん。風太郎君の事をぶどうなんて思わなかつたんだ。でも、あたし、クラス委員長だからクラスの皆のために率先して悪い事をしようとしている人を止めないといけないから……だから、だから……怒らないで？」

「うわー、どうするよこれ。すっごく面倒なことになつたんじゃないのかしら？」

「は、はは、別に怒つてないから気にしなくていいよ。じゃ、俺、教室に戻るから」

逃げようとした俺の腕を掴む。まだ何か言いたい事があるらしい。

「今度はどうしたの？」

「お願いだから、他のみんなに変な事を言わないで、もう、ぐずつ……あまり友達もできなくて風太郎君に嫌われたらあたし、どうすればいいのか……」

「あ、うん、『』、『めんねえ』」

まさか男子との会話が聞かれていたとは……いや、声高らかに最後の方は『よきにはからえ、がははは』ってやつてたからな。そりや

誰でも聞こえるか。

「……そついえば、風太郎君に昨日の夜電話したんだ」

「え?」

「そうしたら生徒会長が出て、びっくりしたよ。驚いてきつちやつて…本当に、びっくりしたよ…あ、ごめん、ネクタイ曲がつちやつたね」

別にネクタイは曲がっていなかつた。だけど、中原さんはそれを正してくれて…ちょっときつめに絞めてくれた

「あ、ごめん、つい力がこもっちゃつて」

「あ、いいよーいよ…」

「じゃ、あたしもう行くね」

すぐさま笑顔になつて行つてしまつた中原さん。なんとなく、嘘泣きしていたんじゃないかと思つてしまつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4875x/>

チャック全開ですよ

2011年10月19日09時23分発行